

# 岩

手県から宮城県に南下する東北最大の河川、北上川。現在の本流とは異なるかつての流れは、石巻湾に流れ込む旧北上川に残っている。

旧北上川の河口には、石巻市の中心部が広がる。江戸時代、南部藩から水運によって下ってきた米がここでいったん降ろされ、千石船に積み替えられて江戸へ運ばれた。その拠点となる港町として栄えたのが石巻である。市街地の南に位置する門脇町も、2つの寺院を中心とした、寺町のような落ち着いた佇まいのまちとして発展してきた。

## ◆深い絆で結ばれたまち

門脇で生まれ育った村上ちか子さんは、まちの特徴をこう語る。「子どもも年寄りもいて、住民が助け合って暮らしていました。食料の貸し借りがあったり、おっかないおばちゃんがいったり」  
 櫛の歯が欠けるように住民がいなくなるごとに、その賑わいも薄

# 被災地に、家が建つ

## 宮城・石巻市新門脇地区復興土地区画整理事業

(2013年◆平成25年9月より開始)

## 新田匡史

につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata



## 変わる日本の「暮らし」と「まち」

34

れていったと残念がる。

「でも最後に残ったのは、気心の知れた人ばかり。身内より濃いつながりだったと思いますよ」

2011年3月11日の東日本大震災。揺れが収まると、当時89歳だった母親が叫んだ。

「逃げる！」

村上さんは、津波のことなどまったく頭になかったという。

「外が異様に静かだったことを覚えていますが。でも、どうせ戻ってくるのだからと、のんびり雨戸を閉め、寒さをしのぐ上着と母に言われて準備しておいたお金を持って日和山に向かいました」

避難した場所は寒く、近所の女子高に移動することになった。だが、母親が歩けなくなった。

「うちはここでいいからと言ったのですが、ご近所さんがみんなで助けてくれたのです。あのときは本当にありがたかったですね」

その途中、村上さんは自分の家が流されるのを見る。思わず「やめてくれ」と叫んだ。石巻湾を襲

った津波は湾に面した南浜町などを飲み込み、さらに内陸の門脇地区にも押し寄せた。平地部は壊滅的被害を受けたのである。

間もなく、まちは復興を目指して動き始める。新門脇地区復興街づくり協議会。の会長を務める田代方政氏は、こう当時を振り返る。「被災した住民がばらばらになっってしまったので、まちづくりについて大勢で意見交換する場がなくなってしまったのです」

翌年、田代氏は「復興街づくり協議会」を立ち上げた。一方、石巻市から復興土地区画整理事業を要請されたURは、震災から約2年半後の2013年9月に事業をスタートさせる。復興街づくり協議会とも緊密に連携し、まちづくりの3つの目標を掲げた。

という思いもあるのです」

通常、区画整理事業はある一定の区画全体が整備されてから地権者に引き渡される。区画整理とともに「新門脇」と名を変えたこの地区も、来年から再来年秋にかけて段階的に引き渡される。だが市は、「新門脇」全体の工事に大きな影響が出ない村上さんほか3世帯の土地整備を先行し、12月に引き渡すこととした。来年の春には、3軒の家が新門脇に建つ。その理由について、木村氏はこう語る。

「門脇は、もともとコミュニティのつながりが強い地区です。この3軒の家が戻った姿を見れば、周囲に土地を持っている住民のみならず、前向きに考えてくださるのではないかと期待したのです」

市の方針に合わせるべく、URは急ピッチで作業を進めた。「でも、汚水管は再来年まで使用することができません。周囲の工事もこれからです。こんな状態でお渡ししていいのだろうか。当初は

申し訳ない気持ちでいっぱいでした」

そう語るのには、UR石巻復興支援事務所の松原弘明だ。だが、日が経つにつれ思い直したという。「まちをつくる目的は、住民のみならずが戻ってくることです。完程度より、思いを叶えることが大事だと気づいたのです」

村上さんは「思いを受け取ってください」URさんに感謝しています」と語る。石巻市の亀山紘市長も、URに謝意を示す。

「URさんには、多大なるご尽力をいただいております。今後ともまちづくりのノウハウを最大限に発揮していただきたい」

被災し、何もなくなった場所に家が建つ。その姿が人々に与える影響は計り知れない。それが連鎖していけば、かつての賑わいが戻るのにはそう遠くない。今、

新門脇でその第1歩が踏み出された。



石巻市新門脇地区では、3世帯の地権者に宅地の引渡しが行われた。

ーチを可能にし、夜間の避難を誘導する照明灯を設置する。

◆住民の希望を叶えたい

それに加え、石巻湾に設置する7・2メートルの防潮堤、旧北上川の河川堤防、宅地の盛土など、安全に配慮したまちづくりは住民に安心感を与える。とはいえ、住民の津波に対する恐怖感も根強い。「被害が大きかっただけに、元の土地に戻ることに二の足を踏む住民がいるのも事実です」

田代氏はそう言う。その一方で1日でも早く自分の土地に戻りたいと願う人もいる。村上さんだ。「90歳を超える母が早く戻りたいと言っています。元気がうちに叶えてあげたいと思いました」

かつての「ご近所さん」に対する感謝の気持ちもあるという。「避難するとき、歩けない母を近所のみなさんが助けてくださいました。3年半が過ぎた今、元気に暮らしている姿をお知らせしたい

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

[企画制作] 新潮社